

# 発達障害児の書字のつまずきの評価基準の検討

運筆課題を実施した個別事例の結果整理から

○竹森亜美

大石幸二

（立教大学現代心理学部）

KEY WORDS: 書字 運筆 評価

## 問題と目的

発達障害を抱える子どもには、感覚の過敏さや鈍麻といった特有の感覚処理特性がある。これら感覚特性は動作形成にも影響を与え、線を引いたり（＝運筆）、文字を書いたり（＝書字）する際の視覚や注意の配分、力加減の調節、あるいは視覚・運動協応のような繊細な反応に影響を及ぼす。また、運筆や書字への苦手意識や拒否感が生じると、学校教育の段階において「書字負担感」が増大するという二次的・派生的つまずきも懸念される。

竹森・大石(2019, 2020) は、書字における運動調節能力の向上を目的として、線の濃淡を描き分ける筆圧調節課題を実施した。その結果、運筆課題の逸脱率、身体の動かし方のような観察された行動、支援対象児の「課題難易度」に関する主観的評価は改善傾向が見られたが、文字の判読性に大きな変化は見られず、「疲労感」も低減しなかった。そこで本研究では、書字の主観的評価として支援対象児への聞き取り、客観的評価として運筆課題の逸脱率の算出と行動観察を実施し、書字のつまずきの評価基準を検討する。

## 方法

**支援対象児** 支援の対象とされたのは、公立小学校通常学級に在籍する 3 年生男子 1 名であった。生活年齢 6 歳 1 ヶ月時に「自閉スペクトラム症の疑い」という診断を受けている。書字や運筆の際は、手指や上体に過度に力を入れることで運動速度や運動方向を調節する様子が見られた。

**倫理的配慮** 本研究実施前に、所属機関において倫理承認を得た(承認番号:16-01)。その後、保護者に研究目的と課題内容を説明し、研究結果報告の同意を得た。また、支援対象児にも課題内容を説明し、研究参加の承諾を得た。

**期間と場面設定** X 年 11 月から 1 月にかけて、Y 大学構内の一室にて、計 4 回の運筆課題を実施した。その後は研究計画を立案していたものの、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大のため、課題実施は見合わせている。

**手続き** 支援対象児への介入として、筆圧調節課題、運筆課題、振り返りシートの順で課題を実施した。筆圧調節課題は、竹森・大石(2020) で用いた波線の濃淡を描き分ける運筆課題を実施した。運筆課題は『knock knock 視覚発達支援ドリルシリーズ』(株式会社スプリングス) から、運動方向の切り替えが多い「ぐるぐる迷路」を採用した。

**主観的評価** 振り返りシートを用いて、課題終了後に「難しさ」「慎重さ」「疲れ」の主観的評価を聞き取った。なお、「慎重さ」の例として「線からはみ出さないように気をつける」「間違えないように気をつける」と説明した。

**客観的評価** 運筆課題の分析と行動観察から評価した。

・**運筆課題**…迷路の外枠から逸脱した回数を計測し、運動方向の切り替えが必要な箇所を割ったものを「逸脱率」として算出した。

・**行動観察**…臨床心理学を専攻する学部生・大学院生 10 名が課題実施の様子を同室で観察した。観察項目は支援対象児が「力が入っていた」と回答した身体部位を参考に 7 項目を設定し、4 件法で評定を求めた。行動観察項目は後述の Figure 2 に記載している。

## 結果

運筆課題の逸脱率および支援対象児への「難しさ」「慎重さ」「疲れ」の主観的評価を Figure 1 に示す。

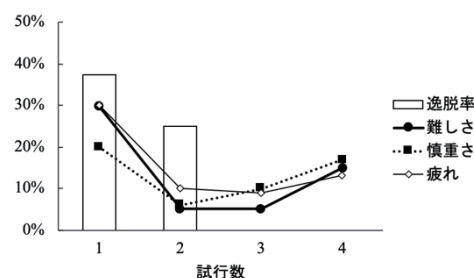


Figure 1 運筆課題結果

逸脱率は試行を重ねるごとに減少し、3 試行目からは 0 となった。主観的評価は、2 試行目からいずれも増加傾向が見られた。運筆課題の行動観察結果を Figure 2 に示す

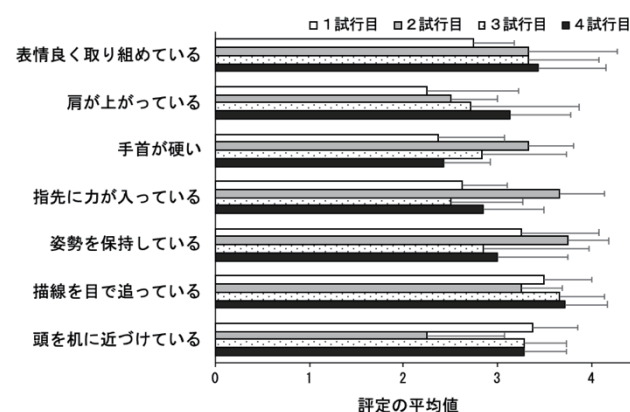


Figure 2 行動観察結果の平均値（エラーバーは標準偏差）

逸脱数と同様に負荷が減少する傾向を示した項目は、「表情良く取り組んでいる」のみであった。また、行動観察結果には大きなばらつきが見られた。

## 考察

筆圧調節課題の結果、試行数を重ねるごとに運筆課題の逸脱率は減少した。が、支援対象児の主観的評価と行動観察結果との間に、一貫した傾向は見出せなかった。以上のことから、書字のつまずきの評価は、逸脱率といった成果物のみで判断するのではなく支援対象児による主観的評価を加味するとともに、書字場面の行動観察も、観察項目や評定基準を精査する必要があることが示唆された。ただし、支援対象児が自分の身体感覚を的確に把握できる程度は不明であり、この点についても慎重な検討が必要である。

## 引用文献

- 竹森亜美・大石幸二 (2019). 書字における力加減の調整に焦点を当てた介入の検討. 日本特殊教育学会第 57 回大会 (広島大学・東広島キャンパス), P15-36.
- 竹森亜美・大石幸二 (2020). 発達障害児の書字負担感と運動調節能力の関連の検討. 日本特殊教育学会第 58 回大会 (オンライン開催), P9-25.

(TAKEMORI Ami, OISHI Kouji)